

詩人の存在観を如実に証明する作品である。(かかる詩的志向はすでに処女詩集においても、はつきり示されてはいたが。——上記「解釈と鑑賞」の拙稿を参照されたい。)

△旅▽にして、△讚美歌▽にして、そこには美的実存、倫理の実存の段階を超えて、さらに宗教的実存の段階にまで歩を印する詩人

隠岐方言の丁寧表現法

神 部 宏 泰

の面目が見られる。それ故、「単独者の愛の唄」というその愛は、決して甘美なナルシズム(自己愛)ではなく、絶えず実存としての不安と恐怖と不条理におののきながら、神をわれから生きんとする宗教的人間回復の厳しい試練の愛であるように思う。

(1967・7・20)

一、

隠岐方言の、敬語法として立つ顕著なものに、「ゴザル」および「〜シャル(サツシャル)」の二敬語がある。この「ゴザル」および「〜シャル(サツシャル)」は、いわば、古態の敬語として、今日、全国的に、退化の傾向が著しい。が、山陰、特に、その北方海上に位置する隠岐は、右の敬語の、現に優勢な地域の一つである。隠岐における右の敬語の存立状況については、次の二小稿を参照していただきたい。

隠岐島五箇方言の「ゴザル」について △国文学放22▽

隠岐方言の敬語法 △国語国文学論文集6▽

— 「〜シャル(サツシャル)」敬語について —

さて、右の「ゴザル」は、本来、「ある」「居る」「行く」「来

る」の敬語として用いられたが、今日では、総体的に、その用法が限定されてきている。例えば、共通語におこなわれる「ゴザイマス」(△「ゴザル」+「マス」)は、「ある」の意義のみでもって立つているにすぎない。隠岐でも、「行く」の敬語法としては、もはやおこなわれなくなっている。すなわち、隠岐の「ゴザル」は、「ある」「居る」「来る」三者の敬語として存立しているのである。ところで、「ある」の意義の「ゴザル」は、ふつう、「丁寧法」に立つ。本稿では、主として、この「ゴザル」にかかわる「丁寧法」を、特定の角度から検討してみたいと思う。

二、

「ある」の敬語としての「ゴザル」は一般に、次下のようにおこ

なわれる。

○ヤマ ニマツノ キカ。ゴザル。

山に松の木があります。△五箇▽（△▽内は地名を示す。

以下同じ）

○ヤネカラ オタケサシタ コトカ。ゴザル だ。

屋根から叫ばれたことがありますよ。△五箇▽

○ドージエンノヨーナ コター ゴザラス ワ。

島前のようなことはありませんよ。△五箇▽

以上は、いわば、独立の動詞としての用法に立つものである。これは、また、次のように、補助的にもおこなわれる。

○ドコカ ヤドデ ゴザル。

どこが宿です。△五箇▽

○バシヨカ ワルー ゴザルダケ ノ。

場所が悪いですからねえ。△五箇▽

このような、「ある」にかかわる「ゴザル」は、「島後」（隠岐群島中、北部に位置する最大の島を指す。）の、五箇を中心とした北部一帯でみられやすいが、「島後」南部の西郷町など、他地域では比較的劣勢におもむきつつある。

ところで、一方に、その「ゴザル」が、「マス」と結合して成立したとみられる「ゴザンス」がある。この「ゴザンス」も、「ゴザル」同様、「ある」「居る」「来る」三者の意義をもつておこなわれる。が、なかでも、「ある」にかかわる丁寧の用法が著しい。

○マツチカ ゴザンス カノ。

マツチがありますか。△五箇▽

○エマデモ ゴザンス。

今でもあります。△西郷・飯田▽

このようなものの外に、補助的にも頻用されるが、そのうち、特に注目されるのは、「〜テ ゴザンス」の形をとるものである。

○フジユーナ メニ アエマシテ ゴザンス。

不自由なめにあいました。△五箇▽

○ボンニ ナーマシテ ゴザンス。

盆になりました。△西郷・飯田▽

○ハオ クローニ ソメテ エキヨットテ ゴザンス。

齒を黒く染めて△お嫁に▽行つていました。△西ノ島・珍崎▽

この「〜テ ゴザンス」は、きわめて丁寧な表現をしたてる。右の例文でいえば、「アエマシテ」「ナーマシテ」など、すでに「マス」をとった丁寧の叙述をも、さらに大きく包摂して、より深い丁寧の心意を表出する。この丁寧の表現構造の、いわば中核ともいべき位置に立つ「テ」の措定性にかかわる特別の機能に注意したい。この「テ」を一つの軸として、右の、高い敬意の表現が成立している。（藤原与一先生「文法」△日本方言学▽二六二―二六三参照）

ちなみに、「〜テ ゴザル」（「〜テ ゴザンス」でなく）という形は、全域にわたつて、あまりおこなわれない。「テ」の表示する敬意を受けるのに、この方言社会では、もはや「ゴザル」は、ふさわしくなくなつていたのであろう。

なお、「〜デ ゴザンス」も、次例のようにおこなわれ、全域に盛んである。

○ハツボンダキデ ゴザンス。
初盆だけでございます。△西郷・飯田▽

先に、「くテ ゴザル」の劣勢を指摘したが、「くデ ゴザル」は、「くデ ゴザンス」と共に、ごくふつうにおこなわれている。これからしても、先述した「テ」の、敬意に関する特別の機能を認めることができる。

三、

さて、隠岐方言には、次例のような、注目すべき語法がある。

○トートー シナシテス。

とうとうなくなりました。△布施▽

○コノ キンネンワ、オトロエマシテス ナー。

最近は衰えましたねえ。△西郷・今津▽

○シゴクツエ エキマシテス。

四、五回行きました。△西郷・伊後▽

○エラエメニ アヨーツテス ワナ。

ひどいめにあつていましたよ。△西郷・中条▽

○オバーサンカ オクラシテス。

おばあさんが送られました。△五箇▽

右の例文にみられる「くテス」がそれである。「テス」は、動詞および助動詞の、いわゆる連用形を受けて、丁寧法に立つ。つねに、この「テス」の形でおこなわれ、他の活用形は認められない。「オトロエマシテス」「エキマシテス」などのように、「マス」を受けてもおこなわれる点が興味深い。

ところで、右の「テス」にも、先述した「テゴザンス」などの場合と同様、敬語表現の転回の軸としての、「テ」の機能を認めることができるのではないか。つまり、一語としての把握が可能か

える「テス」も、実は、例えば「エキマシテ ス」などのように、「テ」「ス」それぞれ、独自のはたらきをなっているとみることができそうである。こうみると、「テス」も、先の「テゴザンス」などと、きわめて類似した表現機能をみせることに気づくのである。

右のようにして得た「テス」の「ス」を、筆者は、「ゴザンス」に由来するものとみたい。すなわち、「テゴザンス」が縮音化して、「テス」が成立したとみたいのである。

○ムカシワ アリョーツテスガ キンネンワ ナシニ ナツテ
ゴザンス。

昔はありましたが、近年はなくなりました。△西郷・中▽
これは、一文中に「テス」と「テゴザンス」とが併用された例である。両者には、意味機能の差は、ほとんど認められない。ただ、「テス」の方が、いくらかぞんざいである。

右の、「ゴザンス」↓「ス」に関連して、次のことが注意される。すなわち、「ゴザンス」は、一方に、「ゴワンス」(「ゴワス」)とも転訛しているのである。

○エチリワ ラクニ ゴワンス ワー。

一里は十分にありますよ。△布施▽

○コドモカ エット ゴワスケー。

子供がたくさんありますから。△五箇▽

このような「ゴワンス」(「ゴワス」)は、「ある」の意味でしかおこなわれない。これが補助的に用いられたもの、

○ビョーキシテ シンダ モノガ オーカッテ ゴワンス ワ
ナ。

病氣して死んだ者が多うございましたよ。△布施▽

のような「テゴワンス」などが、「テス」に至る最短距離にあつたものと想察される。この想察を、一つ助けるものは、「テゴワンス」(「テゴワス」と「テス」との、分布領域と使用層とにかかわる、相関の関係である。

(「テゴワンス」(「テゴワス」)は隠岐全域にみられるが、特に「島後」南部地区で、比較的多用される。「テス」も、また同様の分布状況をみせる。

「テゴワンス」(「テゴワス」)は、主として老年男子におこなわれ、「テス」もまた、主として老年男子におこなわれる。

このような、「テゴワンス」(「テゴワス」)・「テス」の、分布、使用層それぞれの相関の状況は、両者の密接な関係を思わせる。さらに、先述した、両者の意味機能の類似ということがある。以上の諸点から、当面の「テス」は、「テゴザンス」「テゴワンス」(「テゴワス」)から転じて成立したものとみることができようと思う。

四、

主として「島後」南部地区に、また、次下のように、特異な丁寧表現がおこなわれる。

○サザエガ トレマスルデース。

さざえがとれます。△西郷・今津▽

○オーキナ リョーオ スルデース。

大漁をします。△西郷・今津▽

○オーキナ エワガ アルデース。

大きな岩があります。△布施▽

○ヤスデ ックデース。

やすで突きます。△布施▽

これらの例文にみられる「デース」が注目される。「デース」と、「デ」の長呼される音相は、たちどころに耳をとらえて、特異である。これを、

○エチパン タワ ヨケーデス。

いちばん田はたくさんあります。△西郷・飯田▽

などの、ひろく全層にわたつておこなわれる「デス」と、同列にみることはできない。「デース」には、一種の重厚さが認められ、主として老年男子に観察される。しかも、すでに述べたように、だいたい「島後」南部地区に存立するのである。

この「デース」を、「ゴザンス」「ゴワンス」(「デゴワス」)が補助的におこなわれた、「デゴザンス」「デゴワンス」などに由来するものとみることができないだろうか。

○ウミノ ハタデ ゴワンス。

海のそばです。△西郷・飯田▽

など、「デ」が類用の結果、先述の「テス」のたどつたのと同様な経過によつて、「デース」が成立していつたのであろう。こうみれば、主として老年男子によつて、しかも、「島後」南部地区におこなわれやすいという事実も、おのずからに諒解されてくる。

「テゴザンス」「テゴワンス」(「テゴワス」)が「テス」を、「デゴザンス」「デゴワンス」(「デゴワス」)が「デース」を、相即的に、それぞれ特異な丁寧語を成立せしめている点は、別して興味深い。

五、

以上にとりあげた、「ゴザンス」系とみられる「テス」「デース」が、共に、「島後」南部地区を、分布の主城としている点は、注目しに値する。

隠岐にあつては、「島後」南部に位置する西郷町が、政治・経済・文化の中心地である。いわば、一般には、言語改新は、まず、この地域にみられることが少なくない。右の「テス」、「デース」も

熊本市域方言における形容語イの研究

金 丸 和 子

言語新化の事実が指摘される。その分布状況は、よく、成立と分布との、相関の理を物語るものといえよう。
隠岐方言の「丁寧表現法」記述にあつては、他に、動詞関係でも、「マス」「デス」などの活動をとりあげなくてはならない。小稿では、ただ、「ゴザル」一派にかかわる、特定の表現法をとりあげ、記述したにとどまる。

目 次

序

第一章 意味による分類

第一節 意味分類

第二節 分野比較

一 分野相互の比較

二 各分野内での項目相互の比較

(A) 第Ⅰ分野 (B) 第Ⅱ分野

第三節 形容詞と形容動詞

第二章 語の形態による分類

第一節 形容詞

一 単純形容詞の語尾形態

(A) カ語尾 (B) イ語尾

二 複合形容詞の形態

(A) 体言＋基本形容詞 (B) 体言＋助詞＋基本形容詞 (C) 動詞＋基本形容詞 (D) 副詞＋基本形容詞 (E) 形容詞語幹＋基本

形容詞

三 派生形容詞の形態

(A) 体言＋基本形容詞 (B) 動詞＋基本形容詞 (C) 形容詞語幹

＋基本形容詞

＋基本形容詞